



2013年
会報 冬号
No.37

目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

会員の皆様、新年、あけましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしくお願いいたします。さて、新しい年ははじまりですね。一年の計は元旦にあり！と言いますが、皆さんも、何か計画は立てられましたか？わたしは、今年一年は「変革への準備の年」と決めて、いろんな面で、勉強や実験、調査、研究を楽しみつつ、自分らしい変革の形を模索してみようと思います。これまで、忙しい、忙しい、と時間的にもメンタル的にも、少々ゆとりをなくしてしまってきましたので、そんな風では、皆さんにも悪影響を及ぼしてしまう。いけない、いけない！そんな反省もあって、大晦日にはマイ・パワースポット「平塚神社」で、ヒトガタ祓いの儀式をしていただき、罪と穢を祓っていただきました。でも、自分の人生のハンドルをにぎるのは、自分自身ですからね。人生二度なし。一寸先に死んでも悔いはない！それだと大変だから、明日死んでも悔いはない！ぐらいいしておこうかな？とにかく、そんな人生を送れるように、魂を呼び覚まし、意識を常に上昇気流へ乗っけていきたいと思っています。

シティ・ライツの活動の中でも、日頃、皆さんが、どんなことに困っているのか、どんなことが嬉しいのか？など、いろいろとご意見をきいてみたいですね。そして、皆さんが、提案し、参加し、自分らしい創造に向かっていけるような、そんなしくみを作って、映画愛だけでなく、生きている楽しみが活動への参加定着につながっていくような。そんな感じにしていきたいですね。まずは、総会でお知らせした、ボランティアMLの新設や、チーム制の復活などからはじめようと思っていますが、今年はいろんな面で、皆さんとの率直な意見交換を楽しんでいきたいと思っていますので、是非、おつきあいください。

意気込みはこんな感じですが、実際のところ、活動予定は詰まっています、早くも忙しい年になりそうです。今号は、ページ数の関係で、「お知らせ」のコーナーを割愛させていただきますので、大きな行事だけお知らせします。1月27日は、全国バリアフリー上映ネットワークの代表者会議。2月10日は、昨年のシティ・ライツ映画祭で募金を送った、福島県視覚障害者サポートグループ「ゆかり」さんが行うバリアフリー上映会。3月9日、10日は、調布映画祭。今年は「東京原発」「ローマの休日」「宇宙兄弟」の3作品に音声ガイドをつけます。それから、3月20日は鎌倉の川喜多記念映画館で「戦場のメリークリスマス」の上映と観光を楽しむツアーを組みたいと思います。それぞれ、詳細が決まり次第、ML等でお知らせしていきますので、どうぞ楽しみにお待ちください。



活動報告

このコーナーでは、近日(10～12月まで)に開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・ 10/16 調布シネサロン「陽のあたる坂道」 調布市グリーンホール
- ・ 10/27 「桐島、部活やめるってよ」 角川シネマ新宿
- ・ 11/3 「最強のふたり」 新宿武蔵野館
- ・ 11/23 「のぼうの城」 ユナイテッドシネマ浦和
- ・ 12/1 「菖蒲」 岩波ホール
- ・ 12/8 「北のカナリアたち」 川崎チネチッタ
- ・ 12/9 立教大学ボランティアセンター主催 だれでも楽しい映画会 「ハーモニー 心がつなぐストーリー」
- ・ 12/15 「阿賀に生きる」 渋谷ユーロスペース

同行鑑賞会の中から



最強のふたり

10/28に、新宿武蔵野館で、「最強のふたり」の鑑賞会が行われました。当日参加された大勢の参加者の中から、感想をいただいたので記載します。(メーリングリスト clccからの転載です)

こんにちは、白くまと申します。 いつもありがとうございます。

本日、新宿武蔵野館で行われました池袋チーム企画の「最強のふたり」鑑賞会に参加させていただきました。

音声ガイドは、あの甘く、優しく、ちょっと、ロマンティックな声で、葉から芽も出してしまうようなパワーの「ハカラムさん」

字幕吹き替えは、13人の多くの声優さん達が参加してくださり、演出家としての檀さんが、プロデュースしてくださった作品。

そう、つまり、音声映画としても「最強のふたり」なんですよ。

○東京・新宿・午前9時、武蔵野館での入場整理券、ナンバーワンをゲット

昨夜から並んでいたワケではないんですが、うまいこと手にいれることができました。

武蔵野館、直接組、新宿駅中央東口組、に続々、入場整理券が配られてゆきます。

平塚リーダーさん以下、池袋チームの皆様が活躍です。

○東京・新宿・武蔵野館・午前9時30分、入場整理券1番から10名ごとに入場開始です。

そして、無事、全員、難しい手続きの映画館でしたが、着席することができて、ハカラムさんのガイドを待ちます。

ということで、最高の人数の参加者の誘導、平塚リーダーさん・池袋チームの皆様、ありがとうございました。

○東京・新宿・歌舞伎町・12時30分、映画終了後、サンペイグループの「はやしや」さんに移動。

池袋チームの三輪さん・清本さんに事前の段取りから、お手配まで、大変、お世話になり、ありがとうございました。

食事会、楽しかったですが、オイラのテーブルでは、まあ、いろんな話が飛び交いまして、最初は、シティ・ライツ会報秋号の平塚代表のご挨拶の内容が、素晴らしい内容だったですよえ、という話になりまして、今回の映画の障害を負うというテーマにもからんだ「視覚が不自由な人」という表現から、いわゆる「健常者」という表現まで、すごく見識のある奥深いお話だった、という内容から、まあ、でるわでるわ、ちょっと、変なおじさんが、つまり、オイラがしゃべり過ぎまして、ちょっと、内緒の内容まで、エヘヘでした。最後に、ハカラムさんからのご挨拶がありまして、すごい拍手が続きました。

何だか、本日のダイジェストを書いただけで、もうかなりの長文になってしまいました。

すいません、でも少しでも、本題の感想を書かせていただきます。長文、申し訳ございません。

この映画の背景に見え隠れしている人としての「強さ」って、何ですか？

うーん、色々ありますよねえ・・・

笑い飛ばし、明るく生きる強さ、泣き叫びながらも生きる強さ、オープンマインドで、淡々と生きる強さ、あなたにとって、強さとは、何ですか？

と、ハカラムさんに、甘く、優しく、ちょっと、ロマンティックな声で問われて、

まだ、その答えは、みつけれないけど、どんな境遇にあっても、人として、一生懸命に生きていければ、と心で感じた白くまでしたです。

まるで、ザワめく、戸惑う自分の心に、ちいさいけど、いくつもの宝石を散りばめてくれるような本当に素晴らしい映画を、プレゼントくださった池袋チームの皆様、ありがとうございました。

こんばんは、豆乳プリンです。

本日 実施された同行鑑賞会 『最強のふたり』の感想を書かせていただきます。

パラグライダーの事故により頸から下が麻痺してしまったフィリップにとっては、心の中で求めているのがドリスのような人だったのでしょ。フィリップを障害者や病人として扱わずに接してくれる点に満足したのだと思います。

粗暴で型破りだけれど根底には人を思いやる気持ちがあるドリス。そして、フィリップは豊富な人生経験に裏打ちされた人を見る目によって、ドリスを介護人として採用したのだと思うのです。

『最強のふたり』というタイトルが、この作品の魅力をみごとに言い当てているなあと感じたのは私だけでしょうか。フィリップとドリス、お互いに相手もっていないものを与え合い、自分もっていないものを補ってもらい、とても良い関係を築いていったのです。

介護される人とする人という重たくなりがちな関係をユーモラスに明るく描きながら、その望ましいあり方を、さりげなく観客に考えさせてくれる魅力的な映画だと思います。この作品と出会って本当によかったと、観終わったときに心から思いました。

音声ガイドを担当して下さったハカラムさん、食事会のことでお骨折りいただいたみわっちさん、誘導して下さった塚原さんをはじめ、皆さんありがとうございました。



今年ももちろんやります、シティ・ライツ映画祭

早いもので第6回目を迎えるシティ・ライツ映画祭。今回はいつも増して新人実行委員さんが沢山加わって下さり、にぎやかに準備を開始しています。会報原稿を集めている12月時点では上映作品選定真っ盛りだったり、会場の抽選予約にどきどきだったり…。そんなわけで、新人実行委員さんにフレッシュで熱いメッセージをいくつかお寄せいただきました。これを読めばきっと第6回映画祭がますます楽しみになること請け合いです。

そうそう、お知らせを忘れてはいけません。第6回シティ・ライツ映画祭の日程は6月30日(日)。場所はおなじみの江戸東京博物館です。

「第6回映画祭に向けて」

遥はるみ

第6回映画祭実行委員会が始まった。今年初めて実行委員になった。何もできない私が実行委員が勤まるのだろうか？と、不安な気持ちだったが、ポンと背中を押され、今ここにいる。実行委員長のノンちゃんを中心に、ベテラン、新人、それぞれが活発に意見を出し合い、会場チーム、映画選定チーム、各々の宿題が決まってくる。私は、無謀にも、この二つのチームに手を挙げていた。

会場チームの宿題は、江戸東京博物館での抽選会だ。私は、6月分の抽選会に参加。ところが、その数日前、浅草でおみくじをひいたら、な、なんと凶！あれもこれも、ダメ、だめ、駄目。そんな「凶運」？の持ち主、果たしてその結果は？当日、登録のための列に並ぶところから緊張、膝ががくがくふるえだした。さあ、いよいよ抽選本番！抽選箱に手を入れ引いた番号は、なんと「3」。希望日をゲットでき、嬉しくて「やったね！」と思わず叫びそうになり、あわてて口を抑えた。良い経験をさせてもらって、感謝。

さて、映画選定チームの宿題は、まずは、推薦映画を上げること。過去の記憶をたどりながら、あれこれ思いを巡らせ、なんとか作品をアップ。次は、実行委員から出された作品を観て、マイベスト3を決めることだ。初めてレンタルDVDを利用した。観たい作品が数多くあり「あれもこれも借りたいなあ」、おっと、のんきなことを言っている場合じゃない。毎日、1、2作品を観て、それらを評価していかなければならないのだ。大変だったけれど、いろいろな作品に出逢えて、とても楽しい作業だった。みんなが選んだ作品をさらに絞り込み、映画祭で上映する作品を決定する。どんな作品が選ばれるだろう？楽しみである。

実行委員となり、映画祭を作り上げていく大変さと楽しさを味わいながら、今年を終えようとしている。まだまだやらなければならないことがたくさんあるだろう。自分には何ができるのか？と常に不安な気持ちもあるが、ここには、私の「いる場所」がある。できるこ

とが少なくとも、何かしら“できること”がある。温かく受け入れてくれる仲間がいる。“映画”というキーワードで繋がっていく仲間たち。会報が皆さんのお手元に届く頃は、新しい年。映画祭に向けて、新たなことにプチチャレンジ、悪戦苦闘しながらも、ワクワクした気持ちで一歩ずつ前へ進んでいるだろう。

もっともっと、たくさんの方と出逢い、繋がって如果能たら、とても幸せ。映画祭でお会いできることを楽しみにしています。

「私からの熱いメッセージ」

東王地 規予

ここ20年とんと映画館に足を運んでいなかった私ですが、同行鑑賞会に参加して、改めて映画の楽しさに目覚めてしまいました！しかも、以前より2倍も3倍も!!

なぜって…

情景描写のおかげで、視覚だけではわからない情報を知ることができる。見終わってからの懇談会ではいろ～んな感想が聞けるので、新たな気づきがあっておもしろい。だから、できる限り同行鑑賞会に参加したいと思っています。

そして、映画祭。

現在、作品選定の真っ最中ですが、皆さん熱い☆

今までの経験と、仕事絡みの知識や情報で、バシバシ討論しています。(私はその渦中、何も発言できず、ただ感心して聞いているばかりでしたが…)

心が揺さぶられるお祭りになる事間違いナシ！

自分自身がスッゴクワクワクしています♪

一人でも多くの方と、この映画祭と一緒に楽しみたいです!!

飯嶋くらら

「おもしろそうと思ったら参加してみて」とのお誘いに、好奇心だけで気軽に はじめてしまいました。

会場や作品の選定を具体化する段階には、期日があり、候補作品の視聴などスケジュール調整も大変です。

でも、実行委員の経験者から経験談を聞いた事があります「実行委員は、大変だけど、その大変さが すごく面白い」

実際その通りです。

会場選定：ある会場で抽選の仕組みや方法を知り、会場選定の経験者から必要事項や要領も教えて頂き、くじ運にドキドキ感も体験し、同席した仲間とのチームワークも体験しました。来れないメンバーも気にしてくれていて、報告したら、一緒に喜びを分かち合えます。

作品選定：最初は義務感でうろたえますが、映画好きの各自が推薦した古今東西の映画を見られるチャンスです。HAPPYだし、LUCKY！ 意外な発見がステキです。世界が広がりますよ。

候補作品の鑑賞会：洋画で日本語吹替版がない時は、字幕読みにも初トライ。もう1人の方も初めてとの事だし、とりあえずは情報が伝わればいいから棒読みと開き直ったら、パートナーが上手で、つられて、絵本の読み聞かせ程度の感情は入れられたかな…普段なら尻込みしてしまう事でも、お役に立つならと自分のベストは尽くしました。でも、作品推薦者の同席に後から気づき焦りました…イメージ壊してごめんなさい。それに女性らしいセリフが苦手なものも発見しました。普段、他の方の吹き替えや音声ガイドを楽しませて頂くばかりですが、大変さと、面白さを垣間見られる経験でした。

大事な時期に体調を崩した時も「できる時に できる事を できる人がすればいい…後ろから来る人の為に ちょっとドアを押さえていてあげる程度の気楽さで」と、懐が広くて深い、頼りになる仲間がいます。

全てが初体験なのでこれからもいろいろ あるとは思いますが、仲間と一緒になら大丈夫、楽しみながら、やって行きます。

平井 智行

この度、実行委員になりました平井と申します。私に何が出来るかどうか分かりませんが、単に映画が好きなので、なんだか面白そう、といった軽い気持ちで参加することにしました。映画祭の運営にまつわる様々な手配については、全くの素人で分からないことだらけですが、映画祭楽しかったよ、とっていただけるよう頑張っていきますので、よろしく願います。



特集

映画祭をめぐる

～僕は、永遠の愛を求める旅人なのさ～

何回目か忘れてました。2つほど取り上げてみました。

<概要>(ウィキペディアより)

○大阪ヨーロッパ映画祭

大阪ヨーロッパ映画祭は、大阪市で毎年11月に開催される映画祭。

映像芸術を主な媒介に、日欧交流促進並びに地域文化振興への寄与をめざし、上映・展示・講演など各種イベントを企画・構成、のべ1ヶ月に渡る日欧文化交流事業として1994年より毎年開催。様々な人種・多様な価値観が混在するヨーロッパ各国の作品を幅広い国籍とテーマで紹介している。

1994年から幕をあけ、今年で19年目を迎えた大阪ヨーロッパ映画祭。今まで上映してきた作品数は、最新作だけでも180本以上、旧作を含めると300本以上にも及ぶ。またヨーロッパ各国から多くのゲストが映画祭のために来日し、ディスカッションやサイン会を通じて、観客と交流を深めてきた。

1994年 名誉委員長:ルイ・マル 主な上映作品:『ありふれた事件』『イヴォンヌの香り』

1996年 名誉委員長:ベルナルド・ベルトルッチ 主な上映作品:『そして僕は恋をする』『8日目』

1997年 名誉委員長:ヴィム・ヴェンダース 主な上映作品:『ぼくのバラ色の人生』

1998年 名誉委員長:ナンニ・モレッティ 主な上映作品:『神のみぞ知る』

2008年 名誉委員長:モーリス・ジャール 主な上映作品:『永遠のこどもたち』

○TAMA CINEMA FORUM(タマシネマフォーラム)

TAMA CINEMA FORUM(タマシネマフォーラム)は、TAMA映画フォーラム実行委員会が毎年多摩市で開催する日本の映画祭である。正式名称は「映画祭TAMA CINEMA FORUM」。略称は「TCF」。「多摩映画祭」と呼ばれることもある。東京・神奈川・埼玉など幅広い地域から数多くの観客が訪れる。

日本を代表する映画祭のひとつである。毎年11月下旬ごろより約1週間開催し、パルテノン多摩大ホール・小ホール、ベルブホール、ヴィータホールの3会場4ホールで上映される。2008年まではやまばとホールでも上映されていた。各ホールで1日に2、3作品前後の映画が上映され、観客は1000円程度の料金で観る事ができる。入場料は廉価ながら上映される映画の質は決して劣ることはなく、監督や出演者が実際にゲストとして招かれ生トークをすることもある。また、第10回(2000年)から設けられたコンペティション・TAMA NEW WAVEでは新進気鋭の映画作家が中・長編映画を上映し、実行委員や一般審査員がグランプリを決め、毎年新たな才能を世に送り出している。第19回(2009年)からはTAMA映画賞が設けられた。

「日本で最も早い映画賞」をモットーに創設された賞である。前年10月から当年9月に劇場公開された作品が対象となる。授賞式はパルテノン多摩にて行われる。

以下、グランプリ作品です

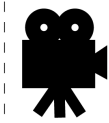
2008年『chain』加治屋彰人監督

2009年『最低』今泉力哉監督

2010年『未来の記録』岸建太朗監督

2011年『私の悲しみ』堀内博志監督

2012年『かしこい狗は、吠えずに笑う』渡部亮平監督



思い出の映画

— 思い出は、名画とともにいつまでも —

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

『思い出の映画』

今野 正隆

今回、会報編集部より「思い出の映画」ということでご連絡をいただいたのですが、改めて遠い記憶をたどってみると、まずは、あの作品とかこの作品とかの前に、私のような世代にとって昭和の映画全盛期を過ごしたことが、様々な記憶で思い浮かぶのでした。たとえば銭湯に行けば脱衣所には、ポスターが所構わず貼っており、幼い私には意味も解らず「総天然色」や「銀幕のスター」「シネマスコープ」「黄金週間」等々耳に、そして目に飛び込んでいたものでした。そしてご多分にもれず我が家の日曜の休みの日の最大のイベントと言えば(当時は土曜は休日ではなかった)若い日の父と母に連れられ弟と、何故か一番の余所行きを着せられ、デパートに向かい、お決まりのように大食堂で食事をし、その後は映画を観に行くことでした。もちろん父もネクタイと背広姿で、母も数日前には「パーマ屋さん」に行きおしゃれの準備を怠らず、プリーツスカートなどを着て出かけたことが浮かんできました。もう死語になりましたが「一張羅という言葉がありました。まさに三丁目の夕陽から抜け出たような家族なのでしたね。お若いCLCの会員の方々にはなかなか想像がつかないことだとは思いますが。そして映画館に行けば前売り券などはないので、いつも休日の館内は立ち見が当たり前の混雑、二本立てのどちらかの作品か解らずに、途中からの入場で、一回りして、最初に見始めたところに来ると、父が「ここからだな。もう帰るぞ。」の号令で一路、家路につくのでした。

さて、前置きが長くなりましたが私の思い出の映画です。観る作品といえば邦画ばかりでしたが、小学一年のとき、夏休みに花の東京に行くことができました。当時集団就職で上京していた叔父の旧盆の敷入りの時期にこちらから訪ねようとしたらしいのですが、この敷入りの休暇というものは今では死語になってしまいましたね。祖母と母と一緒に初めてのお上りさんでした。滞在期間中に一日私を預かることになった叔父でしたが、まだ20代の叔父が私を連れて行ったのが映画館なのでした。この日の出来事は鮮明に覚えているのです。まず最初に入った映画館では、何とニュースだけ上映していたのでした。懐かしいパラマウントニュースだと思うのですが、その他に2、3のニュースをやっていました。どこの場所かは記憶にありませんが、ニュース専門館があったのは私の記憶違いではないと思うのですが。そして、その後、別の映画館に連れていかれたのですが、それが私にとって初めての洋画体験です。田舎では想像もできないような巨大な映画館、そして観たこともないような首が痛くなるほどの大きなスクリーン、さらに煎餅の食べカスや、ゴミが隙間にたまっていない、もちろん穴が空いていないフワフワの椅子。まだ7歳の私にとってこんなところで迷子になったらと思うと、叔父がトイレに行っただけでも不安になったものです。そしてアイスクリームを買ってもらい、裏蓋についたアイスも綺麗に舐め終えた時に始まったのがジョン・ウェイン主演の「アラモの砦」でした。もちろん字幕がないのですが、騎兵隊の戦闘場面やラストシーンのジョン・ウェインの壮絶な姿は、今でも何故か鮮明に記憶に残っているのです。主題歌のメロディーも今でも口ずさむことができるほどです。田舎の少年にとっての大変インパクトのあった「僕の夏休み体験」でした。

そして、それから数年経過した、小学4年生になったとき、引っ越しをすることになったのです。転居先では隣に偶然同じクラスになった子ができ、彼の父親の職業が大映封切り館の映写技師であることがわかりました。それがきっかけで毎回封切り作品が変わる度に、その同級生と一緒に観に連れて行ってもらうことになりました。もちろん裏口からはいる無料招待です。一番最初の時のことは強烈に覚えているのですが、慣れた同級生についていくと、階段を上がり、狭い通路を通りぬけると、私達の特別招待席は、何と映写室でした。薄暗い部屋では機会の音がしてまるで秘密基地に入ったようでした。小さな窓から下を見ると眼下には黒い頭だけが無数に並んでいるのが妙に嬉しかった記憶があります。そしてその日から、高校進学で彼と分かれるまでの6年間は全ての大映作品を観ることになったのです。市川雷蔵の眠狂四郎シリーズ、勝新太郎の兵隊やくざと座頭市。江波恭子や安田美千代の女優陣。田宮次郎そして若山富三郎等々。

そして極め付けは他の映画会社から少し遅れてきた特撮シリーズである、大魔神、ガメラです。ガメラの糸がはっきり見えても

構わないのです。大魔神のストーリーが毎回同じでも構わないのです。ラスト10分の胸のすくような展開は、後に水戸黄門に引き継がれたのではないのでしょうか(笑)それにしても当時は当たり前のように思っていたのですが、今振り返るととても貴重な体験をしたのだと思います。まさに、檀さんがライブガイドで映写室から実況するのと同じ目線で映画を観ていたのですから。

さて長々と述べさせていただきましたが、私のように年を重ねると、次々と思いが浮かんできます。今回、会報編集室よりのきっかけで、忘れかけていたことを思い出すことができました。ありがとうございました。まだまだお話ししたいこともあるのですが、また別の機会がありましたらよろしく願いいたします。

思い出のあの映画:「猿の惑星」

キムチ

あらすじ

宇宙飛行士のテイラーたちは、自動操縦での帰還中、ある惑星に不時着した。そこはなんと、人間が猿に支配された惑星だった。猿に捕えられながらも同じ人間の女性・ノバと出会ったテイラーは脱出し、この惑星の真実を知る。

1968年第一作のアメリカ映画。設定のユニークさや、ショッキングなラスト・シーンが受けて本作は大ヒットとなり、4本の続編と2本のTVシリーズ(実写とアニメ)が作られました。

当時私はまだ中学生で友達数名で観に行きました。猿のメイクアップがよくできていて、しぐさもチンパンジーに似ているのです。その技術は当時のレベルからは飛び抜けて精巧なものだったのでアカデミーメイクアップ賞が設立されたとか。

はるか宇宙のとある惑星にも地球によく似た星があるもんだなあと思っていたら、ラストシーンのニューヨーク、自由の女神がガレキの中から上半身だけ出して埋もれているところでした。

核兵器のスイッチを押してしまった超大国の報復で、人類が滅亡しそれに替わって猿がこの惑星を支配していたんですね。

我が国は唯一の被爆国であり3月11日の東北大地震で原子力発電所の大きな事故も体験しています。

核兵器のない平和な世界になることを皆、望んでいることでしょう。

しかし、核兵器を保有する国が増え、隣国は人工衛星と称してミサイルの発射実験を盛んに行うようになりました。残念ながら12月12日もミサイル実験がなされたという報道がありました。

10分で沖縄県上空を通過し、ほどなくフィリピン沖に達したといえます。

核開発を急ぐ独裁国家がミサイルの力もつけているとなれば、冷静になれる人ばかりではないでしょう。

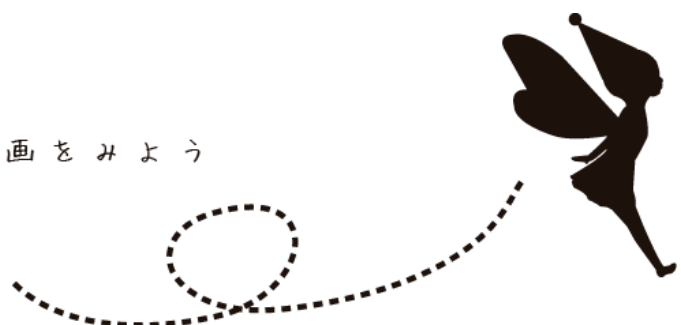
核兵器を一旦保有してしまうと人間は、いつしかそれを使ってみたいという邪悪な考えが起こってくるのです。

自分達が蒔いた種により人間としての文化を失い、まあ猿とは限りませんが、オリジナル版『猿の惑星』のような世界になる日が本当に来るのかもしれないね(°ー°);この映画は当時中学生の私に映画の魅力を教えてくれた作品でした。

どうか2013年もよろしく願いいたします。そして、今後とも同行鑑賞会に参加していろいろな映画の感動を楽しもうではありませんか。

話が替わってしまいますが、ダンコタロウさんと、中つ国ツアー・コンダクターが、『ロード・オブ・ザ・リング』シリーズのピーター・ジャクソン監督の新作『ホビット～思いがけない冒険!』を今月企画してくださいます。指輪物語に登場する人物で指輪の魔力で邪悪な心が次第にとりつき世界を滅ぼすまでの力に発展してしまうという内容は、この「猿の惑星」に共通するところがあります。劇場で皆様とお会いするのを楽しみに筆をおきます。

映画をみよう





編集後記

編集スタッフ、校正係や音訳スタッフも大募集！

希望の方は会報編集課まで！

(会報編集課 ノンちゃん)

暑くて暑くて死にそうな夏が続いたかと思ったら、今度は寒くてびっくりの冬。年々、日本の四季はおかしくなっているような気もしないでもありませんが、負けずにがんばれ！という、私たち人間への挑戦状かもしれないですね。(笑)

いくら季節がへんでも、日々の生活は流れて行きます。今年は目標としていた年間劇場鑑賞本数50本には残念ながら及ばず、この編集後記を書いている12月24日時点で34本。とは言え、数は少なくとも、その中にはとても思い出に残る鑑賞もいくつか含まれていたことは嬉しいことでした。

例えば、先日急逝された若松監督の「海燕ホテル・ブルー」を観たこと。その日は横浜のジャック&ペティの公開初日ということで監督が舞台挨拶にいらしていました。観終わった私たちがいつものように中華のお店でご飯を食べていると、なんと監督たちご一行様がそこへ入ってこられ、ほんの一言でしたがご挨拶をさせていただくことができました。今となっては2度と適うことのない貴重な経験です。さあ、2013年は映画を通してどんな新しい出会いがあるでしょうか？今から楽しみにしています。

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは。この原稿を書いているのは12月8日、ジョンレノンの命日です。

先日、映画を2本見ました。クリント・イーストウッド主演の「人生の特等席」とウディ・アレン監督の「恋のロンドン狂想曲」と言う作品です。両方とも完成度が高く、見終わってすっきりする作品でした。イーストウッドとアレンは自分にとってははずせない存在で、必ず見に行くようにしています。2人とも80歳近くなり(イーストウッドは80を超えています)、なお毎年のように映画を作り続けている映画人。まさに映画界のレジェンドです。彼らのような映画を知り尽くしている方の創作する作品を鑑賞することは、とても勉強・刺激になります。両者の映画づくりに共通していることは、「余計なことはしない」ことだといつも感じています。映画は有限であり、120分程度に収めなくてはならないわけです。限られた枠でドラマを描くわけですから、無駄はカットする必要がある。冗長になると退屈な作品になってしまう。両者とも、「余計なことはしない」技術が本当に上手い。絵で語らせることは絵で語らせ、セリフで説明はしない。過剰な演出は一切行いません。今回もつくりのうまさに感動しっぱなしでした。

今年の最後に、映画で感動できて幸せでした。終わりよければすべてよし、と言ったところでしょうか。来年も、よい映画ライフが出来ることを期待しつつ、年を越したいと思います。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は4月10日。投稿される方は、3月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2013年冬1月10日発行 編集：吉川俊平、斉藤恵子、石坂春香
発行者：バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局：〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995

E-mail mail@citylights01.org URL <http://www.citylights01.org>

